

コース整備のボランティアが定着。雑草取りや小石の除去……。毎週金曜日に。

コース委員会(早坂幸治委員長)とゴルフクラブが呼びかけた、ボランティア活動によるコース整備の軽作業が9月24日から始まり、本格的な冬の訪れまでの毎週金曜日に作業を継続することになった。コース整備のボランティア活動は、4年ほど前、フェアウェイに多いデポットを解消しようとメンバーに呼びかけて目土入れをしたのが始まり。その後、老朽化した白杭の交換などを行ってきたが、来年に迫った国体開催を前に活動も本格化し定着している。

24日午後2時からの約2時間の作業にはメンバーや地元の希望者ら20人、それにゴルフクラブからグリーンキーパー、キャディマスターら4人が加わり、北コースのグリーン上の雑草・ヒメクグの抜き取り取り、同4番の250ヤード付近右側に広がった裸地の石の除去の二手に分かれて汗を流した。ヒメクグはベント芝と比べるとかなり濃い緑の多年草で、ここ数年北コースのグリーン上で目立っていた。薬剤もあるがグリーンの損傷を抑えるため、地下に張った根を専用のフォークで抜き、焼き砂で埋め戻すのが一番効果的といわれる。一番ひどかった北1番はすでにグリーンキーパーらが処理していて、2番以降のグリーン上に散開して、手作業でいねいに抜き取った。

北4番の裸地はフェアウェイ・バンカーの右上手に広がっており、雨などで土が流され、小石がむき出しになっていた。それらを手で拾い、カゴに集めて撤去したが、撤去した石の量は小型トラックに軽く積んで6台分になり、4番グリーン先の空地に廃棄された。それでも、裸地全体の半分程度で残りは次回に回された。

ボランティアのコース整備作業は雑草取りや目土入れ、落ち葉の片づけなど、毎週金曜日に続けられ、参加者には平日の無料プレー券1枚がプレゼントされる。ボランティアには24日の参加者のほかにも参加申し込みがあり、中には「プレーの後でボランティア活動をやってから帰ろうと思います」という遠方からのビジターもあり、活動もすっかり定着した感がある。

ゴルフクラブ側も「国体を前にコース整備にはネコの手も借りたいところで、ボランティア活動には感謝しかない。さらに地元根ざしたゴルフコースとしての盛り上がりを期待したい」と話している。





今年も松の立ち枯れ約 200 本。カミキリムシが運ぶ体長わずか 1 ミリの線虫が元凶。

コース周辺に 800 本を超えて林立し、塩カンの名物的な風景をかもしている赤松だが、その立ち枯れが続いている。フェアウェイやグリーンの手入れが一段落する冬季に、本格的な伐採、撤去に入るが、枯れた松の数は現時点で 200 本を超えるとみられる。

この松枯れをもたらすのは、松クイムシとも呼ばれるマツノマダラカミキリと呼ばれるカミキリムシが犯人と思われがちだが、実際に松に危害を及ぼすのはマツノザイセンチュウという名の線虫だ。このセンチュウはカミキリムシに“寄生”しており、松を枯れさすメカニズムはこうなる。

カミキリは枯れた松の幹や枝の中で越冬、春から夏になって羽化して成虫になり、移動しながら松の若い樹皮若枝を食べる。この時、“寄生”していたセンチュウがカミキリムシから離れ、松の枝や幹に侵入し、松の木が水分を吸い上げる機能を妨害して枯らしてしまうという。

センチュウは北アメリカ原産の体長 1 ミリほどで、明治時代に輸入品の梱包材として使われていた松材に付着して日本に持ち込まれたという。カミキリもセンチュウも牝 1 匹が 100 個ほどの卵を産み、とくにセンチュウは 5 日ほどで成虫になるほど成長力が高い。

塩カンでも毎年、薬剤散布をしてセンチュウを運ぶカミキリムシの駆除を繰り返しているが、成長力の方がまさっているのが実情。枯れた松を早期に伐採して排除しなければさらに被害が広がるため、順次、伐採して処分するほかなくコース管理泣かせになっている。コース管理上やっかいな事態になっている。



塩原カントリークラブ！攻略編！！【北コース】 — 中里 鉄也プロ —

☆北コース9番☆



【コース解説】

平らな右ドックレッグのミドルホール！

【中里プロからのアドバイス】

1打目は右コーナーに松の木、バンカーがある為フェアウェイ左側狙い。

2打目はやや打上で、手前にバンカーがあるのでグリーン左側狙い。

グリーンは右奥から傾斜がある為、手前から攻めていきたい！

次回は、中コース1番を紹介します!!



那須の小天狗——小針春芳伝⑪

井上 安正

小野光一との因縁に戻ろう。これは、一九二七(昭和二)年に始まった日本オープンゴルフ選手権史上、初めての出来事として語り継がれているが、おそらく今後も同じことが起きることはないだろう。日本オープンは毎年夏に開催される日本のメジャー大会で、プロ、アマを問わず、腕に自信のあるゴルファーにとって、一度はその栄冠を手にする夢を抱く。

一九六〇(昭和三五)年二月に、今上天皇徳仁殿下が誕生、八月には第十七回オリンピックがイタリア・ローマで開催され、日本は男子体操で初めて金メダルを獲得して国中をわかせた。五月にはチリ地震津波で、北海道、三陸沿岸で、死者・行方不明者百三十九人を出したが、秋には池田勇人首相が所得倍増計画を発表し、「レジャーブーム」という言葉が世に広まった。

その九月十七日、秋晴れの広野ゴルフ倶楽部(兵庫・三木市)で、第二十五回日本オープンが開幕した。三日間72ホールの大大会で、最終日の決勝は36ホールを回る当時の日本オープン方式で争われた。百二十六人がエントリーして五十人が決勝に残った。

決勝の最終組は陳清波、小野光一、小針春芳の三人。陳は前年に続き二連覇を狙っていた。終盤、陳が抜け出し、292でホールアウト、小針が294で二位、松田司郎、藤井義将、O・ムーディーが299で三位タイのはずだった。優勝を逃した悔しさを胸に押し込めながら、小針は小野と風呂で汗を流していた。

「大変だ。陳さんが失格になった。スコアに誤記があった」

「小針さん、優勝です」

競技委員の一人が風呂場に駆け込んで来てそう叫んだ。一瞬、小針は「失格なんていうことがあるんだっけ」と、頭の中が真っ白になるような気がした。小野の顔からは、血の気が引いて行った。小野が陳のカードのマーカーだったからだ。

ゴルフのスコアは、そのプレーヤーのマーカーに指名された人が、各ホールでそのプレーヤーのカードにスコアを記入する。最終的に合計した後、そのプレーヤーにカードを渡し、受け取ったプレーヤーは、自分でもスコアを確認して間違いがなければ、サインをしてスコア提出所の担当者に提出する。マーカーが記入したスコアに間違いがあれば、そこで訂正すれば問題はない。しかし、間違いのまま提出されれば、失格となるのがルールである。スコア担当の競技委員が各ホールに付き添い、独自にスコアを控えており、それと照合して正誤の判定を下す。

問題になったのは、最終ラウンドの11番パー4のスコアだった。陳は2打目をバンカーに入れて、寄せきれずにボギー。小針はパーで上がった。陳のマーカーだった小野が、陳のスコアが「5」のところを「4」と記入してしまっていたが、その段階では陳がそれを知るよしもない。

陳が連覇したとなると、一九三六(昭和一一)年の宮本留吉以来、二十四年振りの快拳となる。ホールアウトし、マーカーの小野からスコアカードを渡されたとたん、ドッと新聞記者に囲まれてしまった。スコアカード提出所は報道陣の入室は規制され、ゆっくりと点検して出せる。しかし、「二連覇」という快拳とあって、報道陣も半ばパニック状態だった。

最終ホールからスコア提出所まで少し距離が長いこともあって、記者の質問攻め遭いながら歩を進めていた陳自身も、頭の中は相当混乱していただろう。提出所で自分がつけていたスコアと入念に照合したはずだった。が、小野の誤記入を見つけ出せぬままに、自分の名前を書いてカードを出してしまった。



表彰式は今のようには18番グリーンではなく、クラブハウスの中で執り行われた。優勝カップを受け取っても、小針はなんとなく居づらい気持ちだった。ついさっき、陳に「おめでとう」と声をかけ、握手をして別れて、小針にすれば納得の負けだった。正真正銘の二位だったのにと複雑な思いがこみ上げ、ちっとも嬉しいとは思わなかった。

優勝賞金は七十万円だった。カメラマンの注文で撮ったカップを抱いた写真の顔は、どこことなくぎこちなかった。小野はといえば、自分が犯したミスに声もなかった。「本人に最終確認の責任がある」と言ってしまうまでだが、それで済ます気にはなれなかった。二人で陳を慰めることが出来ぬものかと思案した。お金か物か、はてまた……。妙案も出ぬまま、陳と同じ台湾出身で大先輩の陳清水に相談した。

結局、小針が六万円、小野が四万円を出して、ちょうど一〇万円にして陳清波に“謝罪”の気持ちを届けることになり、そこから先は清水にまかせた。清水は思案の末、デパートでカシミアのスーツを誂え、「小針と小野から」と謝意を添え、デパートから届けさせた。

時は巡って平成になってから、雑誌の対談で、陳が「そのスーツを今でも持っている」と明かしたのを知った。メジャートーナメントでは、日本ゴルフ史上初にして唯一の珍事に話題が及んで、清波がそう打ち明けた。小針は驚かされただけでなく、わだかまりが消えるような気がした。

そして、清波は「あのスーツが十万円もしたなんて、今、初めて知りました」とも。清水が値段を明かしてしまっただけは、「身もフタもない」と思って、知らせなかったに違いない。清水の心遣いが小針の胸にしみ入った。

(つづく)





編集後記

ようやく新型コロナウイルスの感染防止のための緊急事態宣言も解消された。だからといって、すぐに感染が始まる前の日常に戻るわけには行きそうもない。マスクの着用、隣人との距離の確保、部屋の換気の三つは新日常として覚悟しなければならない。それを怠れば冬の訪れとともに、第6波が襲ってくるのは確実に専門家が口をそろえる。秋空に映える那須連山を見渡しながら、アキアカネの飛び交う空に向かって白球を飛ばす。気分を晴らし、覚悟を新たにしよう。
(や)

